

津
端
亨
編
纂

現代短歌分類辭典

新裝判
42卷

現代短歌分類詩典

津

端

亨

編

纂

江苏工业学院图书馆
藏章

新装判
42卷

現代短歌分類辞典

新装版42卷

通卷200

平成六年八月十日発行	定價一七、四〇〇円
著者兼印刷者	津端亨
発行所	現代短歌分類辞典刊行所
	代表 津端亨
〒345	埼玉県北葛郡杉戸町宮前一九六一五
	電話(〇四八〇)三八一〇〇四〇番
	振替 東京三一九三一四

(ISBN4-87706-200-9)

目次

目次

	歌数	頁数		歌数	頁数		歌数	頁数
ねむり	一六〇	一	ねんいり〔念入り〕	二	三七	ねんずる〔念ずる〕	一二	四五
ねむりぐさ〔眠草〕	四	五	ねんえき〔粘液〕	三	三七	ねんせい〔粘性〕	一	四六
ねむりぐすり〔眠り薬〕	三一	五	ねんが〔年賀〕	一	三七	ねんだい〔年代〕	一	四六
ねむる〔眠る〕	三四三	六	ねんがじょう〔年賀状〕	二	三七	ねんだいき〔年代記〕	一	四六
ねむろ〔根室〕	七	一六	ねんがっぴ〔年月日〕	一	三八	ねんちゅうぎょうじ〔年中行事〕	一	四六
ねもごろ〔懇ろ〕	一三七	一七	ねんかん〔年間〕	三	三八	ねんちよう〔年長〕	四	四六
ねもと〔根元〕	三四	二二	ねんがん〔念願〕	一四	三八	ねんちようしゃ〔年長者〕	四	四六
ねものがたり〔寝物語〕	二	二二	ねんき〔年忌〕	二	三九	ねんど〔年度〕	二	四六
ねや〔闇〕	一一二	二二	ねんきん〔年金〕	二	三九	ねんど〔粘土〕	一九	四七
ねやす〔値安〕	三	二五	ねんぐまい〔年貢米〕	二	三九	ねんとう〔年頭〕	五	四七
ねやど〔闇処〕	一	二五	ねんげつ〔年月・としつき〕	七	四〇	ねんとう〔念頭〕	二	四七
ねゆき〔根雪〕	二五	二六	ねんこう〔年功〕	二	四二	ねんどしつ〔粘土質〕	一	四七
ねよごる〔寝汚〕	一	二六	ねんごう〔年号〕	七	四二	ねんない〔年内〕	一	四七
ねらいうち〔狙い打ち〕	一	二六	ねんごろ〔懇ろ〕	七八	四二	ねんね	三	四八
ねらう〔狙う〕	二	二六	ねんざ〔捻挫〕	二	四四	ねんねこ	四	四八
ねりいと〔練り糸〕	一	二七	ねんざん〔年産〕	一	四四	ねんねん〔年年〕	一四三	四八
ねりなおす〔練り直す〕	一	二七	ねんし〔年始〕	七	四四	ねんねん〔念念〕	二	五一
ねりゆく〔練り行く〕	六	二七	ねんじ〔年次〕	一	四五	ねんばい〔年配・年輩〕	二	五一
ねる〔寝る〕	二六四	二七	ねんしき〔年式〕	一	四五	ねんびょう〔年表〕	四	五一
ねる〔練る〕	二四	三五	ねんじゅう〔年中〕	二	四五	ねんぷ〔年賦〕	一	五一
ねる〔練る〕	二	三六	ねんじゅうぎょうじ〔年中行事〕	一	四五	ねんぷ〔年譜〕	九	五一
ねるそん〔ネルソン〕	二	三六	ねんしょう〔年少〕	四	四五	ねんぶつ〔念仏〕	七七	五一
ねろ〔根〕	一	三六	ねんしょう〔燃焼〕	三	四五	ねんぶつてら〔念仏寺〕	一	五四
ねわけ〔根分け〕	四	三六	ねんず〔念誦〕	二	四五	ねんぶつしゅう〔念仏宗〕	一	五四
ねわら〔寝蓐〕	五	三六	ねんすう〔年数〕	一	四五	ねんまく〔粘膜〕	一	五五

ねんまつ〔年末〕	一二	五五	のうぐ〔農具〕	六一	二五	のうてん〔脳天〕	三	一一三
ねんよ〔年余〕	五	五五	のうげか〔脳外科〕	一一	二五	のうと〔ノート〕	二四	一一三
ねんりき〔念力〕	三	五五	のうこう〔農耕〕	八	二六	のうど〔農奴〕	一	一一三
ねんりょう〔燃料〕	三	五五	のうこう〔濃厚〕	三	二六	のうど〔濃度〕	三	一一三
ねんりん〔年輪〕	二七	五五	のうこつ〔納骨〕	四	二六	のうどう〔農道〕	一	一一三
ねんれい〔年齢〕	八一	五六	のうこつどう〔納骨堂〕	六	二六	のうどうてき〔能動的〕	一	一一三
の	一一	五九	のうこん〔濃紺〕	四	二六	のうとるだむ〔ノートルダム〕	六	一一三
の〔野〕	一七	二四	のうさぎ〔野兎〕	一七	二六	のうなんかしょう〔脳軟化症〕	三	一一四
の	四	一〇七	のうさく〔農作〕	三	二七	のうねくたい〔ノーネクタイ〕	一	一一四
のあ〔ノア〕	一三	一〇七	のうさつ〔悩殺〕	二	二七	のうのと	七	一一四
のあざみ〔野薊〕	一	一〇七	のうさんぶつ〔農産物〕	一	二七	のうはんき〔農繁期〕	三	一一四
のあのはこぶね〔ノアの箱船・ノアの方舟〕	七	一〇八	のうじ〔能事〕	一	二七	のうび〔濃尾〕	二	一一四
のいちご〔野苺〕	一	一〇八	のうじ〔農事〕	二	二七	のうびへいや〔濃尾平野〕	三	一一四
のいね〔野稻〕	九	一〇八	のうしゃ〔農舎〕	一	二七	のうびょう〔脳病〕	二	一一五
のいばら〔野薔薇・野茨〕	一	一一〇	のうしゅく〔濃縮〕	三	二七	のうびょういん〔脳病院〕	八	一一五
のいろおぜ〔ノイローゼ〕	三	七	のうしゅっけつ〔脳出血〕	四	二八	のうひんけつ〔脳貧血〕	四	一一五
のう〔脳〕	三	七	のうしょ〔能書〕	三	二八	のうふ〔農夫〕	七	一一五
のういっけつ〔脳溢血〕	一	一一二	のうしょう〔農相〕	二	二八	のうふ〔農婦〕	一	一一七
のうえん〔脳炎〕	一	一一二	のうじょう〔農場〕	一九	二八	のうぶたい〔能舞台〕	二	一一八
のうえん〔農園〕	一	一一二	のうじん〔農人〕	一六	二九	のうぶる〔ノーブル〕	一	一一八
のうえん〔濃艶〕	三	一一二	のうずい〔脳髄〕	四	二九	のうべるしょう〔ノーベル賞〕	三	一一八
のうか〔農家〕	六	一一二	のうせい〔農政〕	三	二九	のうほう〔農法〕	五	一一八
のうがく〔能楽〕	六	一一四	のうせい〔納税〕	一	二九	のうほん〔納本〕	一	一一八
のうがく〔農学〕	三	一一四	のうせんかざら〔凌霄花〕	二	二九	のうまくえん〔脳膜炎〕	一	一一九
のうがく〔農閑期〕	一	一一四	のうそん〔農村〕	三	三〇	のうみつ〔濃密〕	二	一一九
のうかんき〔農閑期〕	四	一一五	のうたん〔濃淡〕	二〇	二二	のうみん〔農民〕	五	一一九
のうきぐ〔農機具〕	一	一一五	のうちかいかく〔農地改革〕	三	二二	のうむ〔濃霧〕	五	一一〇
のうきょう〔農協〕	二	一一五	のうちゅう〔腦中〕	一	二二	のうめん〔能面〕	七	一一三
のうぎょう〔農業〕	一	一一五						

のうやく〔農業〕	七二二	のけし〔野芥子〕	一六七	のしかかる〔申し掛かる〕	一五二〇二
のうやくしゃ〔能役者〕	一一三	のけもの〔除ける〕	一六七	のじきく〔野路菊〕	二二〇二
のうり〔能吏〕	二二三	のける〔除ける〕	二六七	のじし〔野猪〕	四二〇二
のうり〔脳裏〕	一一三	のける〔退ける〕	七六七	のじゆく〔野宿〕	三二〇二
のうりつ〔能率〕	三二三	のこぎり〔鋸〕	六六一六七	のじりこ〔野尻湖〕	五二〇二
のうりよう〔納涼〕	七二三	のこぎりくず〔鋸屑〕	一五一六九	のしろ〔能代〕	三二〇三
のうりよく〔能力〕	八二三	のこぎりさう〔鋸草〕	一一七〇	のじん〔野陣〕	二二〇三
のうりよく〔濃緑〕	三〇二三	のこぎりば〔鋸齒〕	四一七〇	のずえ〔野末〕	七七二〇三
のうるし〔野漆〕	一一三四	のこぎりやま〔鋸山〕	一八一七〇	のすたるじあ〔ノスタルジ〕	四二〇五
のおくり〔野送り〕	二二三四	のこくず〔鋸屑〕	一五一七〇	のぜり〔野芹〕	一六二〇五
のがも〔野鴨〕	二五二三四	のこす〔残す〕	一七三二七一	のせる〔乗せる〕	六二〇六
のがれる〔遁れる・逃れる〕	一一三五	のこのこ	四一七五	のぞかす〔覗かす〕	一八二〇六
のかわ〔野川〕	六二二三五	のこめ〔鋸目〕	一一七五	のぞかせる〔覗かせる〕	五二〇六
のき〔軒〕	六二三七	のこらず〔残らず〕	四三二七五	のぞきこむ〔覗き込む〕	六二〇七
のぎく〔野菊〕	一五七一五三	のこり〔残り〕	一三二七七	のぞきみ〔覗き見〕	四四二〇七
のきさき〔軒先〕	三二二五七	のこりが〔残り香〕	三二七七	のぞきめがね〔覗き眼鏡〕	一一〇八
のきした〔軒下〕	七六一五八	のこりすくな〔残り少な・のこりすくない〕	一〇一七七	のぞく〔除く〕	一三二〇八
のぎつね〔野狐〕	一八一六〇	のこりなく〔残り無く〕	一〇一七八	のぞく〔覗く〕	一七七二〇九
のきどい〔軒樋〕	二二六〇	のこりび〔残り火〕	七二七八	のぞける〔覗ける〕	一三二二四
のきなみ〔軒並み〕	七二六〇	のこる〔残る〕	六九八一七八	のぞける〔覗ける〕	二二二四
のきば〔軒端〕	一七一一六一	のさつぷみさき〔納沙布岬〕	三二九七	のぞける〔覗ける〕	二二二四
のきばのすず〔軒端鈴〕	一一六五	のさなわ〔野沢菜〕	一一九七	のぞみ〔望み〕	九二二二四
のきやみ〔軒闇〕	一一六五	のさばる	一一九七	のぞみみる〔望み見る〕	三二二七
のぎらん〔蘭〕	一一六五	のざらし〔野晒し〕	五一九七	のぞむ〔臨む〕	三〇二二七
のく〔退く〕	二九二六六	のし〔熨斗〕	一一九八	のぞむ〔望む〕	四八二二八
のぐちひでよ〔野口英世〕	一一六六	のじ〔野路・のみち〕	一四一九八	のそりと	八二二九
のくるみ〔野胡桃〕	一一六七	のじ〔野地〕	二〇二〇一	のそりのそりと	四二二九
のけさま〔仰げ様〕	二二六七	のしあるく〔申し歩く〕	二二〇一	のだ〔野田〕	六二三〇

のだひら〔野平〕	九三〇	のと〔和閑〕	三三三	のびやか〔伸びやか〕	一三二六
のたうつ	四三〇	のどか〔長閑か〕	二二六	のびらか〔伸びらか〕	一三二七
のだて〔野点て〕	一三〇〇	のどかさ〔長閑かさ〕	四二四	のびる〔伸びる〕	三〇二六
のたぶ〔宣ぶ〕	二二〇〇	のどかなる〔長閑かなる〕	八六二	のびる〔野蒜〕	二二二六
のたまう〔宣う〕	三五三	のどかび〔和日〕	一四四	のぶ〔伸ぶ〕	四三二六
のたまわねど〔宣〕	一三三	のどくび〔喉類〕	一四四	のぶ〔延ぶ〕	一八二七
のたまわす〔宣わす〕	二二二	のどごと	一三四	のふじ〔野藤〕	一二七〇
のたり	三三三	のとはんとう〔能登半島〕	二四六	のぶとい〔野太い〕	二二七一
のだらう	一〇三三	のどぼとけ〔喉仏〕	一三二	のぶろ〔野風呂〕	一五二七
のちつよびと〔後世人〕	一三三	のどもと〔喉元〕	五二六	のぶき〔野蓆〕	一二七一
のちのこと〔後の事〕	五三三	のどやか〔長閑やか〕	一二四	のぶどう〔野葡萄〕	四二七一
のちのち〔後後〕	三三三	のなか〔野中〕	九二七	のぼらふ〔上〕	一三二七
のちのつき〔後の月〕	九三三	のねずみ〔野鼠〕	一六二	のべ〔野辺〕	二四二七
のちのよ〔後の世〕	七六三	ののくさ〔野の草〕	五六二	のべおくり〔野辺送り〕	二二七八
のづかさ〔野阜〕	一三六	ののしり〔罵り〕	二九二	のべつに	二二七九
のっかる〔乗っかる〕	一三六	ののしる〔罵る〕	九四二	のべのおくり〔野辺の送り〕	一三二九
のっく〔ノック〕	三三六	のばす〔伸ばす〕	五八二	のべる〔述べる〕	三二七九
のっそり	一三六	のばと〔野鳩〕	八二五	のほうず〔野放図〕	五二七九
のっそりと	八三六	のばら〔野原〕	八九二	のぼせ〔逆上せ〕	一三二九
のっと〔ノット〕	二二六	のばら〔野薔薇〕	二九二	のぼたん〔野牡丹〕	八二八〇
のっば	一三六	のび〔伸び〕	四四二	のぼとけ〔野仏〕	五二八〇
のづみ〔野積み〕	一三六	のび〔延び〕	八二五	のぼり〔登り〕	七二八〇
のづら〔野面〕	六〇七	のび〔野火〕	一五五	のぼり〔幟〕	五四二八
のてん〔野天〕	二〇二	のびあがる	二六四	のぼりおり〔上り下り〕	一一二八
のてんぶろ〔野天風呂〕	六三九	のびえ〔野稗〕	一六四	のぼりくだり〔上り下り〕	二二八二
のてんゆ〔野天湯〕	五三九	のびたき〔野翁鳥〕	一六五	のぼりぐち〔上り口〕	一一二八
のと〔能登〕	七三三	のびちぢみ〔伸び縮み〕	四二五	のぼりぐち〔登り口〕	一一二八
のど〔喉咽〕	一三四	のびのびと〔伸び伸びと〕	五二五	のぼりざか〔上り坂登り坂〕	一一二八

のぼりべつ〔登別〕	四二八二	のめす	五三〇八	のりだす〔乗り出す〕	三三三三
のぼる〔昇る〕	二〇八二八三	のめのめと	二三〇八	のりつぐ〔乗り継ぐ〕	一三三三
のぼる〔登る〕	八九二八九	のめりこむ	一三〇九	のりつけごろも	一三三三
のぼろぎく〔野菊〕	一一二九一	のめる	一三〇九	のりのちかひ	一三三三
のます〔飲まず・吞まず〕	一〇二九一	のもんはん〔ノモンハン〕	九三〇九	のりと〔祝詞〕	二六三三二
のませる〔飲ませる・吞ませる〕	一一二九一	のやき〔野焼き〕	一三〇九	のりならず〔乗り馴らす〕	一三三三
のまれる〔飲まれる・吞まれる〕	一一二九二	のやま〔野山〕	五一三〇九	のりば〔乗り場〕	六三三三
のみ〔蚤〕	六八二九二	のら〔野良〕	七一三一一	のりまき〔海苔巻き〕	一三三四
のみ〔整〕	七五二九四	のらいぬ〔野良犬〕	一五三三三	のりまわす〔乗り回す〕	二三三四
のみ	二二九六	のらぎ〔野良着〕	二〇三三三	のりもの〔乗り物〕	四三三四
のみ	五二九六	のらくら	二三三四	のる〔乗る〕	二四三三四
のみか	三三二九六	のらしごと〔野良仕事〕	六三三四	のる〔載る〕	一三三三〇
のみくだす〔飲み下す・吞み下す〕	八二九七	のらねこ〔野良猫〕	一九三三四	のる〔宣る〕	一一三三三
のみくひ〔蚤喰〕	一一二九七	のらりくらり	二三三五	のる〔罵〕	一一三三三
のみこみ〔飲み込み・吞み込み〕	八二九七	のり〔海苔〕	一四六三三五	のる〔告〕	一一三三三
のみこむ〔飲み込む・吞み込む〕	二二九八	のりあい〔乗り合い〕	四七三三九	のるうえ〔ノルウエ〕	四三三三
のみさし〔飲み止し・吞み止し〕	二二九八	のりあい〔乗り合い〕	二三三〇	のるまんでい〔ノルマンディ〕	二三三三
のみさす〔飲み止す・吞み止す〕	一一二九八	のりうつき〔糊空木〕	一三三〇	のれん〔暖簾〕	四六三三三
のみすぎ〔飲み過ぎ・吞み過ぎ〕	二二九八	のりうつつる〔乗り移る〕	一三三〇	のろい〔呪い〕	一一三三三
のみち〔野道〕	一八二九八	のりおり〔乗り降り〕	五三三二	のろう〔呪う〕	一四三三三
のみとりこ〔蚤取り粉〕	一一二九九	のりきる〔乗り切る〕	二三三二	のろけ〔惚気〕	二三三三
のみならず	五〇二九九	のりくみいん〔乗組員〕	一三三二	のろし〔狼煙〕	六三三四
のみほす〔飲み干す・飲み乾す・吞み乾す〕	三三三〇	のりくらだけ〔乗鞍岳〕	一三三二	のろろ	四三三三四
のみみず〔飲み水・呑み水〕	四三三〇	のりこち〔乗り心地〕	一三三二	のろま〔鈍間〕	一三三六
のみもの〔飲み物〕	二三〇一	のりこす〔乗り越す〕	一三三二	のろりのろり	一三三六
のむ〔飲む〕	二六三〇一	のりこなす〔乗りこなす〕	一三三二	のろりと	一三三六
のむ〔祈む〕	一〇三〇八	のりこむ〔乗り込む〕	四三三二	のわき〔野分〕	二四三三六
のむぎとうげ〔野麦峠〕	一三〇八	のりそだ〔海苔粗〕	九三三二	のんき〔暢気・呑気〕	七三三四

のんだくれ〔呑んだくれ〕	一三四三	ばいえん〔梅園〕	一一三六六	ばいじん〔徽菌〕	三三三七六
のんびり	一三四三	ばいえん〔煤煙〕	五二 三六七	はいきんぐ〔ハイキング〕	四三三七六
のんびりと	九三四三	はいおく〔廃屋〕	八三六八	はいく〔俳句〕	一一三三七六
は〔歯〕	四一九三四三	ばいおりん〔バイオリン〕	一三六八	はいぐうしゃ〔配偶者〕	一三三七七
ばあい〔場合〕	一〇三五六	ばいか〔梅花〕	二七 三六八	はいぐろし	一三三七七
は	一三五六	はいかしき〔拝賀式〕	四三六九	はいぐん〔敗軍〕	三三七七
は	四三五六	はいかー〔ハイカー〕	一三六九	はいけい〔背景〕	六〇三七七
は	六三五六	はいかい〔俳諧〕	三三六九	ばいけいそう〔梅恵草〕	三三七八
ば	一二三五七	はいかい〔徘徊〕	八三六九	はいけっかく〔肺結核〕	一三七九
はあく〔把握〕	二三五七	ばいかい〔媒介〕	一三七〇	はいけん〔佩剣〕	四三七九
はあけんくろいつ〔ハーゲンクロイツ〕	一三五七	はいかいし〔俳諧師〕	一三七〇	はいご〔背後〕	六〇三七九
ばあさん〔婆さん〕	九三五七	はいかいじ〔俳諧寺〕	六三七〇	はいこう〔廃坑〕	二三八一
はあと〔ハート〕	二三五八	はいかつりょう〔肺活量〕	九三七〇	はいこう〔廃鉱〕	一三八一
はあもにか〔ハーモニカ〕	一一三五八	はいがまい〔胚芽米〕	二三七〇	はいこう〔廃校〕	一三八一
はあり〔羽蟻〕	一三五八	ばいがも〔梅花藻〕	四三七一	はいごう〔俳号〕	一三八一
はい〔肺〕	五七 三五八	はいから〔ハイカラ〕	二三七一	はいざい〔廢材〕	二三八一
はいあがる〔這い上がる〕	四三六〇	はいかん〔拝観〕	五三七一	はいざら〔灰皿〕	三二三八一
はいいろ〔灰色〕	一五九 三六〇	はいかん〔廢艦〕	二三七一	はいざん〔敗殘〕	九三八一
はいいん〔敗因〕	二 三六四	はいがん〔肺癌〕	一三七一	はいざんへい〔敗殘兵〕	六三八二
はいいん〔廢院〕	一 三六五	はいき〔排気〕	七三七一	はいし〔廢止〕	九三八三
はいうえー〔ハイウエ〕	四 三六五	はいき〔廢棄〕	一三七二	はいてら〔廢寺〕	三三八三
ばいうぜんせん〔梅雨前線〕	二 三六五	はいきがす〔排気ガス〕	四三七二	はいしゃ〔敗者〕	四三八三
はいえい〔背泳〕	二 三六五	ばいきゃく〔売却〕	二三七二	はいしゃ〔廢車〕	四三八三
はいえき〔廢液〕	一〇 三六五	はいきゅう〔配給〕	九四 三七二	はいしゃ〔齒医者〕	六三八三
はいえつ〔拝謁〕	一 三六五	はいきよ〔配給〕	四〇 三七四	はいしゃ〔配車〕	一三八四
はいえん〔肺炎〕	七 三六五	はいきょう〔背教〕	二三七五	ばいしゃく〔媒酌〕	二三八四
はいえん〔排煙〕	一 三六六	はいぎょう〔廢業〕	二三七六	はいじゅ〔拝受〕	二三八四
はいえん〔廢園〕	一七 三六六	はいぎん〔拝金〕	一三七六	ばいしゅう〔買収〕	六三八四

はいしゅつ〔輩出〕	一 三八四	はいそう〔敗走〕	一 三九一	はいにん〔背任〕	一 三九七
はいしょ〔配所〕	八 三八四	はいぞう〔肺臓〕	六 三九一	はいね〔ハイネ〕	七 三九七
はいしょ〔俳書〕	一 三八五	ばいぞう〔倍增〕	一 三九一	はいのう〔背囊〕	一七 三九七
はいじょ〔排除〕	三 三八五	はいぞく〔配属〕	一 三九一	ばいばい〔売買〕	四 三九八
ばいしょう〔賠償〕	二 三八五	はいた〔歯痛〕	四 三九二	はいび〔配備〕	二 三九八
はいしょく〔敗色〕	一 三八五	ばいたい〔廃顔〕	一 三九二	はいひいる〔ハイヒール〕	三 三九八
はいしょく〔灰白〕	一 三八五	はいたか〔鶴〕	四 三九二	はいびすかす〔ハイビスカス・這柏槓〕	一 三九八
はいしん〔背信〕	五 三八五	はいたつ〔配達〕	二 三九二	はいひんこ〔廃品庫〕	一 三九九
はいじん〔俳人〕	七 三八五	はいたてき〔排他的〕	一 三九三	ばいぶ〔パイプ〕	三 三九九
はいじん〔廃人〕	一 三八六	はいだむ	一 三九三	はいふき〔灰吹き〕	一 四〇〇
はいす〔拜す〕	二 九 三八六	はいだん〔俳壇〕	一 三九三	はいぶつ〔廃物〕	二 四〇〇
はいす〔配す〕	四 三八七	はいち〔配置〕	一 八 三九三	はいぶつきやく〔排仏棄釈〕	一 四〇〇
はいす〔廃す〕	一 三八七	はいちやく〔廃嫡〕	一 三九三	はいぶん〔俳文〕	一 四〇〇
ばいす〔倍す〕	一 三八七	はいちよう〔敗兆〕	一 三九三	はいへい〔敗兵〕	一 四〇〇
はいすい〔廃水〕	二 三八七	はいてい〔廢帝〕	一 三九四	はいべん〔排便〕	一 四〇〇
はいすい〔排水〕	五 三八七	はいでん〔拜殿〕	一 三九四	はいぼう〔敗亡〕	二 四〇〇
はいすい〔配水〕	一 三八七	はいでん〔配電〕	三 三九四	はいぼく〔敗北〕	一 三 四〇〇
はいすいのじん〔背水の陣〕	一 三八七	ばいてん〔売店〕	一 一 三九四	はいぼくしゅぎ〔敗北主義〕	一 四〇一
ばいすう〔倍数〕	一 三八七	ばいと〔バイト〕	三 八 三九四	はいほん〔配本〕	一 四〇一
はいする〔拜する〕	四 三八七	はいとう〔佩刀〕	一 三九六	はいまつ〔這松〕	七 八 四〇一
はいせき〔廢石〕	一 三八八	はいとう〔廢刀〕	一 三九六	はいめい〔拜命〕	一 四〇三
はいせつ〔排泄〕	四 三八八	はいとう〔廢道〕	三 三九六	ばいめい〔売名〕	一 四〇三
はいせん〔廢船〕	一 三八八	はいとく〔背徳〕	一 三九六	はいめつ〔廢滅〕	一 四〇三
はいせん〔配線〕	一 三八八	ばいどく〔梅毒〕	二 三九六	はいめん〔背面〕	一 六 四〇三
はいせん〔敗戦〕	八 五 三八八	はいどばあく〔ハイドパーク〕	二 三九六	はいやあ〔ハイヤ〕	四 四〇四
はいせん〔廢線〕	一 三九一	はいとりぐさ〔蠅取草〕	一 三九六	ばいやく〔売薬〕	六 四〇四
はいぜん〔配膳〕	二 三九一	はいにち〔排日〕	三 三九六	はいゆう〔俳優〕	一 四 四〇四
はいぜん〔沛然〕	二 三九一	はいによう〔排尿〕	三 三九七	はいよう〔佩用〕	一 四 四〇四

ばいよう〔培養〕	七	四〇五	はいし〔墓石〕	一四一	四五五
はいよる〔這い寄る〕	五	四〇五	ばかがい〔馬鹿貝〕	一	四五八
はいらん〔排卵〕	一	四〇五	はがき〔葉書〕	七五	四五八
はいりこむ〔入り込む〕	八	四〇五	計	一五三	九六
はいりょう〔拝領〕	一	四〇五	首		
ばいりん〔梅林〕	五九	四〇五			
はいる〔入る・いる〕	四二	四〇七			
はいれつ〔配列〕	三	四一八			
ばいろっと〔パイロット〕	一	四一九			
ばいろん〔パイロン〕	五	四一九			
はう〔這う〕	二	四一九			
はうす〔ハウス〕	一三	四一九			
はえ〔蠅・はい〕	三〇〇	四一九			
はえ〔鮠〕	四四	四二八			
はえ〔南風〕	四	四二九			
はえぎわ〔生え際〕	一	四二九			
はへたたき〔蠅叩き〕	三	四二九			
はえのかぜ〔南風〕	一	四二九			
はえる〔映える〕	六	四二九			
はおう〔霸王〕	一	四二九			
はおうじゅ〔霸王樹〕	一五	四三〇			
はおと〔羽音〕	一五	四三〇			
はおり〔羽織〕	一〇	四三四			
はか〔墓〕	五八	四三七			
ばか〔馬鹿〕	二三	四五二			
はがい〔葉間〕	二六	四五三			
はかい〔破戒〕	五	四五四			
はかい〔破壊〕	一五	四五四			

ねむり【名詞】〔続き〕

たはやすく眠りに落ちし童等の顔が何か怡しき思念いだかす
(多摩四)

旅ごころあさき眠りの眼のまへに給仕まけるクリナの青さ⑩

旅の夜の浅き眠りに蕎麦殻を入れし秋の感触を恋ふ①

旅びとのねむりととのふ、大晦日。戸ざしあらめて、い寝なむと

すも⑪

魂は眠りの外に安まらず眠つぶりて耳鳴りを追ふ⑩

魂びびく話に更けし旅泊り深きねむりに明けにけらしも④

たまゆらに眠りに入りし病める児の火照る頬にこそ口触りにけり

ダムマパダの詩偈のひとつを声なくて誦し居たりしが眠りに入ら

む②

歎息のごとく息づき洩らせしが妻はねむりに墮ちてゆくらし①

たれが子は若き声あり光ありゆく春墓にねむりやすかれ①

たれこめて深きねむりに墮つる時わが傍に来り寝る女あり①

単調なりズムくり返す虫の音を機械音ときく浅きねむりに

小さけれど一つの業の為し終へて心たのしく眠りにぞ入る③

力なきおのれ悲しみ在りし夜の浅き眠りにいつか落ちるし①

稚児の眠りの傍に冬支度をいそしむ妻一びきのこほろぎ③

小さき家借り得し今日の昂りにわが老妻の眠りをなさず③

父よりも母よりも永く生きたれば安きねむりに眼を閉ぢよ⑬

乳飲み足り眠りはふかき子の顔に春浅き日の光はとどきぬ

村上 恵子

土岐 善磨

井出 一太郎

釈 迢空

松村 英一

岡野 直七郎

古泉 千樞

寺沢 亮

寺門 一郎

丸岡 桂

北原 白秋

松谷 砂子

中原 綾子

金田 千鶴

金子 不泣

広野 三郎

松村 英一

安田 秋夫

束の間のねむりのうちに帰りつる人をぞ思ふ朝さむれば

疲れはてて墮ちゆく眠りの胸に組む鉄うちつぎてかたきてのひら

月影に明るむ部屋に目覚めて久し母の眠りの今深くあれ

月の夜にひとたび眠りまた覚めてもの書きつくも命生きむため④

月夜霧川にたちつつこの街の眠りふかきにわが俵ゆく②

土の上の眠りかなしく覚めたれば夜を啼く鹿の声ぞきこゆる⑧

土の下の眠りも浅くなりゐんと冬野の青きところは踏まず①

度ましくひとりに寄する禱りあり眠り短き薄明のなか②

妻がねむり五六分ばかり続く間の深き息づきを我ききて居り①

夫も子も眠りしづまりて家うらに栗の葉さやく音ぞきこゆる⑩

掌にもものせむ小さき五輪の塔ふりて人のねむりのしづかなるかも

②

手まくらのかひなのしびれにふとさめて見れば静けき児の眠りか

な

天井を荒るる鼠にねむりさめ午前十二時か風呂はらふ音③

電燈はともりながらに小便更シツち友が眠りの息かすかなり⑤

東京の街のねむりのみじかかこのひと時をきほふこほろぎ②

堂守の蛇は春日に眠りよりさめて遊ばむ菩提樹の下③

冬至より幾日過ぎたるころほひか孤独のねむり窓の薄明⑬

遠くより招はるるごとき児のねむり勢ひて泣ける声止みしより①

とこしえの眠りに入らむときまでも秘めてわがみむうつくしき夢

②

村野 次郎

鈴木 頼母

金田 千鶴

岡野 直七郎

高橋 希人

松村 英一

富小路 禎子

黒沢 武子

高安 国世

今井 邦子

水町 京子

柳原 白蓮

森山 汀川

松村 英一

高橋 希人

鈴木 光子

斎藤 茂吉

酒井 広治

矢沢 孝子

とこしへの眠りにいまは入り給ふ見よ静かなる母のかんばせ⑦

とこへしの眠りに入らむいまはにも母待つ家を思ひましけむ④

床ちかく置く玉葱の香に立つに心やすらげくねむりに入らむ①

轟くは太平洋の波ながら不思議にやすき眠りに入るも③

となりの人妻にはあらじうつつなき眠りにおもふこの肌ざはり②

とめどなき父のねむりや今日もまた百舌鳥のこゑ寒き夕となりぬ

③ (角川文庫)

とめどなく深きにおちてゆくのみの私の眠りを意識してをり④

友が家のざこ寝の眠りいやふかし独りひそかに吾床をのぶる

ともし火の光流るる泉水におぼろに白し鯉の眠りは④

ともすれば覚むる寒夜の子がねむり風ひびく窓に月は坐しつつ⑥

鳥が音に 足らひし眠り さめにけり まこと湖畔の 宿にあり

我は③

とろとろと瓦斯の灯ともる図書館のせらの隅にて眠りを思ふ

(陰影)

戸をふかくとぎして人は長き夜の眠り安らかにいまもいませる⑤

長かりし神経痛もほぼ癒えて夜ごろの眠り安くなりたり③

ながき夜のねむりのゆめをさますべきこの鐘の音を人はいかに聞

く⑧

亡き人を言ううつつ酔ひてわが眠りたちまちにして午後の二時間

④

なだめかねて児を叱る声も聞え来つ朝明の眠り惜しめるわれに

(新萬葉集九)

菊池知勇	矢沢孝子	鹿兒島壽藏	吉田正俊	吉植庄亮	木俣修	小宮良太郎	松倉米吉	四賀光子	木俣修	下村海南	前田夕暮	太田水穂	久保田不二子	安江不空	小暮政次	吉川綾子
------	------	-------	------	------	-----	-------	------	------	-----	------	------	------	--------	------	------	------

何ものぞわれの眠りをうばひしは恋のたのしき夢を破りて

(水莊記)

何物も持たぬ心のさみしさの重き眠りとなりにけるかも⑤

ナフタリン二つを夜毎床に入れやすきねむりを吾はむぼる①

なれが子は若き声あり光ありゆく春墓にねむりやすかれ①

二三日、海辺へ行つてよく眠り、遊ばば癒ると思へる心①

庭くまに眠り覚めたる蟬蛙汝も幾年わがうからにて①

庭の上に猫のねむりの晝ふかし海ちかくして海の音なく⑥

にんげんの現実には悲ししまらくも漂ふごときねむりにゆかむ①

類越しに我を膽りしをみな子もねむりくづれぬ神田を過ぎて⑥

沼底の眠りよりさめし蓮の花水かげらふにくれなるを吐く

南無地藏願王菩薩とこしへのきみがねむりをまもらせたまへ③

ねむりに就くまへのしばらく思ふまま心細るまで母を思ひぬ⑤

眠りに入らむ山うかばせて野の果てに沈黙ふかし夕映ゆる空⑤

眠りに入らん意識の中になほのこる雨だれのみが間違くなりて②

ねむりの寛容さ人情的な重さもなくなって遙かに何処へか還る⑥

ねむりよりさめてかすかに湧く希望うべなはんとすひとりの微笑

⑧

ねむりよりさめて汗ふく夜のほろる畳のうへに菜の花の見ゆ②

ねむりよりさめて褪せふく夜のほろる畳のうへに菜の花の見ゆ②

①

(新萬葉集二・現代短歌大系)

吉井勇	窪田空穂	斎藤喜博	丸岡桂	西村陽吉	佐伯敏子	川田順	斎藤茂吉	釈迺空	浜梨花枝	河杉初子	長沢美津	安田章生	村野次郎	斎藤史	高田浪吉	川崎杜外	川崎杜外	米倉久子
-----	------	------	-----	------	------	-----	------	-----	------	------	------	------	------	-----	------	------	------	------

眠りよりさめたるときに吹きすぐる風明るけれ桔梗の花に
眠りよりさめたる夜半の寂寥は水の中にし生けるが如し①
呪ふ子がもの狂ほしきさげびさへ夜の眠りのなかに聴ゆる

(水荘記)

灯を消して獨りのねむりをたのしめりみづ雪沙々とふる天窓の玻
璃②①

日を経つつ体のいたみもうすらぎてふかき眠りをわれはねむりし

③

ふかき眠り貧らむものと思ひしに雪ほうほうと降りしきるらし④
ふしながら桐の葉にききし雨やみてねむりをさそふこほろぎのこ
ゑ①(片われ月)

襖入れし今宵の部屋に相寄りて妻子のねむり安けかりけり①

(朝霧)

蒲団數かず狭きに馴れてわが寝たり妻のねむりの安けきかなや⑤
舟形にくだり来れば小国川ながれの岸にねむりもよほす

船の上のあさき眠りのさめし時佐渡はさあをく近づきてゐぬ

冬枯の草生の風やこの岡に大きみいのちのねむりしづけし

(地懐以後)

兵營のねむりの喇叭しとすと降り居る雨のなかよりきこゆ②
兵がねむり覚まさずあらむ朝まだき厨の中に水音気づかふ⑩

(支那事変統後)

変態のねむり覚めたる虫の身の白き翅のわなわなとふるへるたり

き①

大内規夫

桐田蔭村

吉井勇

坪野哲久

長沢美津

米田雄郎

金子薫園

奥貫信盈

松村英一

斎藤茂吉

水町京子

橋田東声

斎藤茂吉

岸野愛子

野田孝之

暴力は暴力故に理論持てりと考ふるとき眠りもよほす④
牡丹下に足組まふ獅子のねむり深し蝶まひいでて呼びおこしける
①

枕辺に紫にほふ岩ざくら見つし眠り眼ざめては見つ①

枕べにものいふ声は妻のこゑ安からなれやわれの眠りの⑤

馬子ねむり馬は佇む六月の上富坂をつかれてくださる②

貧しさに痴呆のごとく居るときも子はひたすらの眠りに安し

また明日の仕事の予定を考へて快いねむりにさそはれてゆく②

またたける灯のしたに眠りあり安きねむりとあへて言はなく④

街住みのつかれに一夜よくねむり朝明け映ゆる赤富士知らず②

睫毛ながく見ひらきし目が迫り来と思ひしときに眠りよりさむ②

窓外は月青き夜と思へどもつねのごとくに眠りに就かむ②

眞夜中とおもほゆる頃笹の葉ゆこぼるる雨に吾がねむりさめし

(支那事変戦地)

眞夜中を廁に立つととほす灯に子等がねむりは深くありけり①

(朝霧)

み軍にいま召されゆく兵士らの眠りは深しつしみ通る

(支那事変統後)

短か日の眠りよさめていたづきの病の床に白湯を飲み居り③

短夜のあさきねむりにまだきより空かけめぐる飛行機きこゆ

短夜を吾児がねむりの浅けども涼しき暁のとき近づきぬ

みじめなる落語のおちにこだはれり眠りに入らむ半時の前③

小暮政次

岡山巖

菊山当年男

松村英一

斎藤茂吉

和田厚

清水信

安田青風

村野次郎

山崎一郎

柴生田稔

加藤正雄

奥貫信盈

野地曠二

島木赤彦

小宮良太郎

飯田莫哀

相良義重

みだらにも鶏頭の花土に咲き白犬眠り秋の風吹く(夏より秋)
安からぬ眠りに妻のをることも生計のゆゑとノーマネー吾⑧

夕雨に濡れてたためるねむの葉の今日のねむりを早しと思ふ
(新萬葉集九)

やすらかなねむりにいりしその人を世にまさぬものとなおもいわ

安江 不空

がせ⑩

夕照りのあかるき裾原に子はねむり身にとまり飛ぶあきつはのむ
れ

高田 浪吉

安らぎを眠りに求め夜は悲し氷魚の如き幻想にひて①

藪 阿久里

安らひはねむりよりなしねむらなどはや悲しめる妻の眠に遇ふ③

千代 国一

宿のまへ夜更けて船も来て眠り静かに白し北刀根の川⑬

與謝野 寛

屋根をうつ豪雨の音におどろきて眼ざめしものか深き眠りより⑦

菊池 知勇

病もつ一生を終り今こそは吾子は眠りをほしいままにせり②

木下 利玄

山城の山見てあればのびのびと心眠りに入らむとすらし④

生田 蝶介

山の青葉に陽の翳る頃谷あひにことごとく鶏舎眠りに入りぬ②

井戸川 美和子

山の上のまつ白い石にねむり覚めまだ信じ切れず独りなること

前川 佐美雄

山の上の墓の眠りは続きつつ純愛史ありまさざと冴ゆ②

池原 檀雄

山の温泉にねむりはならず落ちたぎつ瀬の音をきけば吾子いとほ

門間 春雄

し

山峡に篁ありと告げゆきし思ひつつなごみゆきぬ眠りに②

鹿兒島 壽藏

病ひ重き幾夜のわれの枕辺に母の短きねむりは寂し(新萬葉集四)

清水 一雄

山ふかき溪の温泉宿に一夜ねむり朝起きて聞くうぐひすのこゑ①

小泉 琴三

山ふかく入江はねむり松の影あさ日にながし粉のしろの浜①

金子 元臣

山々のねむりにかよふ河の瀬の遠きひびきは千曲なるらん④

太田 水穂

病み弱り妻の眠りのさめやすし今夜も足の寝汗ふきやる②

上田 英夫

病むわれは身体かたばる寝ぐせづき夢多くして眠りすくなき⑨

中村 憲吉

夜のねむりいくたびかさめて咳きこめる子らを気づかふうとうと
として④

高田 浪吉

夜の牡丹雨に崩るる如くにも我の眠りに今宵夢あれ①

若林 牧春

夜早起妻のねむりのかたはらに冷えしわが足まげてねむりぬ①

御供 平信

夜ひと夜いたみつづけしあかときを混沌としてねむりにおちぬ

木俣 修

夜ふかく今はと門をとざしたりみち足らふらむか一夜のねむり③

半田 良平

夜ふけて僧ら眠りに行く頃か足音寒く廊下にきこゆ

渡名喜 守松

夜ふけてねむり苦しきわが上に低くつり垂れぬくらき電燈⑤

松村 英一

雷鳴りて箒の音も止みにけりいつか眠りに落つるしづけさ②④

吉井 勇

露地奥の煤したる部屋のいぶせさも疲れてあれば眠りさまたげず

染谷 進

① ロマンズグレーの髪のぞかせて仕事のあと日中を夫の眠りに眠る

清水 恒子

② わが浅き眠りを揺りて暗く暗く踏切の鐘夜半を鳴りゐる(多磨四)

町田 佐栄子

わがいびき耳にききつつうつつにねむりに入れり日ぐれまぢか

生田 蝶介

を④ わか草の妻のねむりの朝もなほふかき春べとなりけるかな②

吉植 庄亮

若ければねむり安からむデザインする吾を妨げぬし妹ら

三国 玲子

吾子が読む新聞をねてききながらねむりにおちむ今の快さ①

中井 コツフ

わが心やらむ方なき明暮に眠りと云ふはこころ楽しき①

加藤 洵綾

わが抱けるかひなに小さき顔のせてすやすやと児は眠りにぞゆく

金子 薫園

⑥ わがたのむ朝の眠りの二時間足らず夏時間となりて一時間減る②

柴生田 稔

わが妻の眠りにおつる素直さをとこのふ呼吸に感じつつ居り

丹羽 愛二

わが庭の羊歯の葉蔭の蟾蜍の眠りをおもふ月細き夜は②

吉井 勇

わが眠り浅からしめし乳の芯痛みを保つ上に手をおく①

鈴木 光子

わが眠り浅くなりたる夜明けがた軒に触れゆく雲はきこえぬ

真島 勝郎

(新萬葉集七)

わがねむりいまだ深しとおもひつつ聞きおぼえ居る蛸のこゑ④

菊池 知勇

わが眠りいづくに求めむけふのたより友の二人が血を咯きにけり

大熊 長次郎

① わが眠り車に覚めて夜となれば山下り尽く田の蛙なく⑩

與謝野 寛

わが眠り何に妨げられしかと胸のへに組む手をおろしたり②

鹿兒島 壽藏

我眠りの安らかなる夜亡き父が夢に見え来てれやかにもの言ふ②

水野 葉舟

わが眠りは深かりしかな降りいでて今いちめんの雪に沁む雨

鐸木 孝

(多磨三)

わがねむり深かりしとき遠里に子は初声をあげてありしか①(朝霧)

奥貫 信盈

わが眠りふかき闇夜よいづこかで落葉しきりに厚くつもらむ③

久方 寿満子

わが眠りまさぐり醒す梅雨どきの峽の木叢の香りしたしも①

井出 一太郎

わがねむりやうやく深き夜をこめて雨水をかざる木々ありぬべし

小宮 良太郎

④

小宮 良太郎

ねむりぐさ【名詞】〔眠草〕

おじぎそうの別名。まめ科の一年生草本。南米ブラジル原産。莖は直立。高さ約三〇センチ。細毛と刺をもつ。葉は細かい羽状複葉で、ほぼ掌状に配列、二対の羽片から成り、各羽片の小葉は線状長楕円形で二列に配列。葉に指などを触れば閉じ、暫くして開く。夏、葉腋に花梗を出し、淡紅色の小花を球状または長楕円形に付ける。花後、莢果を結ぶ。

目にとめて夕蔭草を吾が見たり眠りやすらにあるよねむり草

宇都野

研

(木群)

夕さればおのづ葉をとぢねむり草この素直さを羨しみにけり

横内 菊枝

枝

(寒紅梅)

眠り草夕べ葉閉づるしづけさに僅かづつ抜き一畠終へつ(淳彦歌集)

金石 淳彦

彦

ねむりぐさの種子に土かけ一くぎりしたる思ひにしばらく居りき

小暮 政次

次

(春天の樹)

ねむりぐすり【名詞】〔眠り薬〕

五官の感受性及び反射機能を亢奮させないで、催眠状態におちいらせるぐすり。

如何にともなれよと思へど煙草を喫みねむりぐすりを服みて苛つ

宇都野

研

も

いをいねず夜深くして玉くしげ匣にまさぐる眠り薬を①

加納 小郭家

家

うつつなき眠り薬の利きこころ百合の薫りにつつまれにけり①

長塚 節

節

現のわれうばはれゆくか幾時をこのいささけき眠り薬に②

九條 武子

子

北の方潮鳴りさむきこえゐて眠り薬のききくるを待つ

田中 栄

栄

(朝日短歌二)

このままに死なばよけむと思ひつつ眠り薬を夜ごと嘸む②

吉井 勇

勇

今宵はた眠り薬のいくつぶに任せはてたる命なりけり(豊雲旗)

佐佐木 信綱

死にせれば人は居ぬかなと歎かひて眠り薬をのみて寝んとす①

斎藤 茂吉

死ぬべくば眠り薬や安からむかく思ひつつ夜ごと寝るわれ②

吉井 勇

旅にして眠り薬を嘔むころ遠き涅槃を恋ふころかも③

吉井 勇

鳥取は足長蟹を食べし後ねむりぐすりを飲みて寝にけり

依田 秋圃

長崎の宿にひとりとなりたれば今日の日課の眠り薬をのみ

橋本 徳寿

ねむりぐすりのみで眼を閉ぢ手さきより、しびれてくるをたのし

渡辺 順三

みて待つ⑤

杉浦 翠子

ねむりぐすり飲^のなと我にいましめの言の葉をさへかなしむものを

杉浦 翠子

③ ねむりぐすり服みてほどあり枕もとに初蛙のこゑ一つきこゆる

宇都野 研

ねむりぐすり服む夜つづきて吾がころ今は昂ぶる物言はざらむ

宇都野 研

眠り薬きかずなりたる現身は昼床にして汗あえてねむる④

吉植 庄亮

眠り薬こよひも飲みて妹は寝蛙うるさくねむれずと言ひ⑤

吉井 勇

眠り薬のむことなどもあらずして凡庸歌人われよくねむる⑥

西田 嵐翠

眠り薬の利きくるころか夜の蠅を憎む意識もうすれついまは

菊地 新

(多層四) 眠り薬ふくみて吾は寝につきぬ螢の光り枕辺にあり①

中村 美穂

眠り薬効くまで坐り遠き梢見凝めてあれば嘆き凝り来る

阿部 静枝

ねむり薬利き初めて来る脳髓の重きやすらけさにおち入りてゆく

大塚 金之助

ねむり薬のみで眠つぶり手先よりしびれてくるをたのしみて待つ

渡邊 順三

眠り薬効きしはしばし暗がりに眼の覚めたるは何か果敢なき

長和 義雄

眠り薬効くまで坐り遠き梢見凝めてあれば嘆き凝り来る

阿部 静枝

眠りがたき勞れに今朝は嘔気持つねむりぐすりは身に利きてゐて

金田 千鶴

春の夜のねむりぐすりのさらさらと白く光りてわが台のうへに⑦

土岐 善磨

みちのくに近き駅路日はくれて一夜ねむるとねむりぐすり飲む②

斎藤 茂吉

夜半の一時をきく苦しさに耐へかねて眠り薬を再びのめり⑦

今井 邦子

夜となれば胸ぬち痛しいかにせむ眠り薬も盡きて久しき⑩

吉井 勇

ねむる【動詞ラ五「四」】「眠る」

「古くは「ねぶる」」①心身の活動が一時的に休止し、目をとじて無意識の状態になる。ねる。②死ぬ。また、死んで埋葬されてゐる。

青じろく霧くだるらむ冬の夜の朝がたにしてやうやくねむる

前川 佐美雄

仰向きに眠る顔だち胸高く押し流れゆく雲もありにけり

北原 白秋

青山にゆふべの雲をしのびつついのちはなしとおもひて眠る②

久保田 不二子

赤き脚短くひろげて眠るあひるよろよとして細き眼をあく

四賀 光子

赤き帯しめて柩に眠る子を忘れて思へや生きのかぎりは

江口 渙

赤き花夜更けて黒く静まるを見さだめて来て眠る窓閉す②

富小路 禎子

⑥ 赤錆びし自動車ボデーころがれば夜をここに來ていくたりねむる

木俣 修

アカシヤの諸葉閉して眠るころ暮れゆく山に星は見え初む

市川 享

飽かずしも酌めるものかなみじか夜を眠ることすらなほ惜みつつ

若山 牧水

暁がた枕をしたるものゆゑに我の頭は疲れて眠る③

島木 赤彦

あかつきに降る雨の音痛む背をみづから揉みて再び眠る

佐藤 志満